

怪鳥ジロンド(〈特集〉文芸ゼミ創作作品集)

萩原, 茜

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

64

(開始ページ / Start Page)

121

(終了ページ / End Page)

124

(発行年 / Year)

2001-07-14

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020189>

はわからなかった。辺りには、こどもの匂いしかなかった。

母はふと、自分はいつかもこのように夜中、走ったことがあるのではないかという気がした。何かを追いかけて、何かを探して闇を駆け抜けたことがあるのではないかという気がした。それは遠い、今そうして走っているからだだけが覚えている記憶だった。確かに自分は走った。息を切らして走れば走るほど、母の中でその思いは強くなっていった。

走り続けて母はついに、大きな川のほとりにたどり着いた。川の手前で、こどもの匂いは消えていた。母は迷った。あのこどもに、この川の流れをこえられるはずがない、と思った。母は川の側で二、三回、行ったり来たりして、それから弾みをつけて、一気に川を渡った。渡ってかき回ると、驚いたことにこどもの匂いがみつげられた。母はそれを追った。確かに何かが起こっているのだとそういう気がした。不安が増して、母はいっそう早く自分を走らせた。例の記憶にも、どんどんちかづいていくような気がした。

こどもの匂いは山を上りはじめた。草ひとつ生えない岩山で、頂上までいくと、切り立った崖になっているはずだった。登りながら母は、増していく不安と例の記憶が、自分の中で結び付いていくのを感じた。その結び付きはまだ混沌として、一致しなすえ何があらわされるのかわからない。母はただ、嫌な予感でいっぱいだった。

頂上が見えてくると、少し先にこどもの姿があるのがわかった。こどもは上を向いて、頂上を指してまっすぐ走っていた。母は少しほっとして、だが次の瞬間はっとした。これから何が

起こるのかわかった。

空からすつと光がさした。雲が破れてそれはあらわれようとしていた。こどもがくるったように走り出した。止められない、と母は思った。母は一声高く鳴いた。こどもは一瞬びくりとした。そのすきに母はがむしゃらに走り、こどもを追い抜いて崖の切っ先に立った。母とこどもの頭上には、真つ白い巨大な月が全景をあらわしていた。昔じぶんも、と母は思い出していた。光を求めて走ってきたのだ……。

母は走ってくるこどもをみつめた。こどもは全身よれよれになって、それでもいっしんに月をみつめていた。崖のことなど気にも止まらない様子だった。母はさつきよりもさらに、高い声で鳴いた。立ち止まったこどもを尻目に、母は崖から高く飛んだ。こどもをいかせないために、と彼女はつぶやいていた。彼女の母も、そうしてある崖から飛び下りたのだった。

こどもの敏感な鼻は、すぐに血の匂いをかぎつけた。かれはその場で二、三度回り、月をもう一度見上げてから、山をおりていった。

(終)

怪鳥ジロンド

萩原 茜

峰岸高雄の夢に落ちてから、ジロンドは身動きがとれなくなつた。ジロンドは動物や植物の夢を渡り、その夢の中の最も美味な果実を食うことで生きている、真つ黒い大きな鳥だ。

ジロンドの種は、卵として産み落とされた時からひとりきりで生きる。群れをなす暮しをしていないし、彼らの滋養である最も美味な果実とは一つの夢に一つしかない。夢から夢へ渡り歩いて生活する彼らが同じ種の仲間に出会えば、それは獲物を奪い合う敵に会ったということだ。ジロンドは、だから、峰岸高雄の夢にひとりで閉じ込められても、寂しいと思うことはなかった。

峰岸高雄は良く寝た。そしてまた良く夢を見た。幾つも幾つも、沈黙はほんの少いで新しい夢を見るので、ジロンドは飢えとは無縁だった。身動きがとれないといってもそれは峰岸高雄の見る夢からでていけないというだけのこと、むしろその世界で彼は強者だった。峰岸高雄の夢には凶暴であるとか獍猛であるとかいう特徴を持ったものは滅多にあらわれなかった。

そのとき、ジロンドはどうやら熱帯雨林のイメージの夢の中にいた。水がごうごう流れる音も聞こえたから、アマゾン川の近くかもしれない。ジロンドは猛禽だからこういった類いの舞台は最も好むところで、果物や小動物を気ままについばんでは、大空への上昇とそれにつぐ下降を繰り返して楽しんでいた。

夢には天井があるのとないたがあるが、その夢はないほうであるらしかった。もしかしたらもつとはるか上まで飛ばせば透明な壁に頭をごつんとぶつける、ということもあるのかもしれないが、ジロンドの翼が満足する限りの高さにおいてそれは起こらなかったから、彼には関係のない話だった。ジロンドは地を蹴り、鬱蒼とした木々の間を空にむかつて斜めに切り裂いて飛び、辺りを見回してもはや自分しか存在しない空の高みを

昇って昇って気が済むまで飛んだ。そして、そろそろ一気に下降するかと地上を見下ろすと、ちょうど真下辺りのジャングルの茂みの中に、何か赤い点のようなものがあるのが目に入った。ジロンドはその赤いものを中心に大きく旋回しながら少しずつ地上に近付いていった。近付くにつれ、赤いものがうごめいている様子が見て取れ、警戒を強める。が、更に近付くとそれが生物ではなく、意思や攻撃性を持たぬらしい大きな布であることがわかったので、射程距離を推測するのをやめ、ばさ、ばさ、と翼をはためかせて、そのすぐ側の地面に足をつけた。

その、体の大きさに見合わぬ巨大な赤い旗を振っていたのは、やせた色の白い少年だった。少年はパジャマを着て裸足で立っていた。暫くじつとジロンドの顔を見ていたが、やがて口を開いて言った。

「君は、一体どうして僕の夢の中にいつもいるんだ。」

ジロンドはそれは自分にもわからない、と言い、自分が夢を渡る鳥であること、どうしてか彼の夢から他のものの夢に移れなくなってしまうことなどを峰岸高雄に説明した。峰岸高雄はいちいちうん、うん、と首を振りながらジロンドの話の聞き、そうしているうちに赤い旗はみるみる縮んで、ハンカチほどの大きさになってしまった。峰岸高雄はそれをきちんと畳んでパジャマの胸ポケットにしまい、君と話せるとは思わなかったよ、と呟いてから、話し始めた。

僕は毎日寝てばかりいる。僕は重い病気なんだ。今はこんな子供みたいな姿をしているけれど、本当はもう少し年をとって

いる。でも、この年格好の頃にはもう病気になるって、寝たり、起きたりの生活だった。今はもう本当の寝たきりだ。

……僕は色々なことを考えるのが好きだった。自分の足でどこにも行けない分、見舞いにきてくれる友達の話の聞くのも楽しくてたまらなかつた。友達が皆大人になり僕の枕元は静まり返ることになったけど、本を読んだり、画集や百科事典を広げたり、機械を使って会ったこともない外国の人と話すことだってできたから、僕の心の中までしんとしてしまふことはなかつた。……まあ、時々はやっぱり寂しかったけどね。……でも、

最近になって僕の体は本当に悪くなった。いつまでも夕焼けの中にいる方法とか、永遠になくならないケーキについてとか、僕が考えるのが好きだったそういうことを考えることもできなくなつた。僕はほとんど一日中眠っていなければならなくなつたんだ。すると、夢を沢山見るようになった。夢の中で僕は行きたかつた場所、行きたくなかつた場所、良く知っている場所、思い当たる節がない場所、色々なところへ行つた。僕の姿はあらゆるものに変わり、それがなんで僕だといえるのかわからないこともあつた。僕はやがて、夢を自分の好きなようにできるこつを身に付けた。初めから見たい夢をみられるわけではないけれど、例えば夢の中で擦れ違つた女の人がとても美味しそうなお菓子を持っていたとする、僕がそれを欲しいと願つたとしても、その人は僕に必ずそれをくれるんだ。僕の望む最上の笑顔付きでね。僕はそうして夢の中でも楽しむことができるようになった。でも、ある日、黒い鳥が、つまり君が現れたんだ。

君だけは僕の思い通りにならなかつた、と峰岸高雄は言つた。

君はたいいて僕の視界の端を一度かすめるかかすめないかぐらゐだつたけど、どうもある頃から夢があまり楽しくなくなつていった。考えてみると、あの黒い鳥を見掛けるようになってから、僕の夢はひと味足りない、鮮やかな疲れみたいなものを残さないものになつてしまつたんだと僕は気付いた。怒らないで欲しいのだけど、君を撃ち落としてしまおうとしたこともあつた。僕は鉄砲に玉をこめ、空を横切っている君をめがけて撃つた。でも君はものすごいスピードで旋回し、僕の夢の端つこのほう、僕からは姿の見えないところまで飛んでいつてしまつた。当たれ、と願つて撃つた玉なのに、空の果てまで飛んで、燃えかすになつて落ちてきたんだ。

峰岸高雄が喉が渴いたな、と呟くと、通り掛かりのオランウータンがコップに汲んだ水をくれた。峰岸高雄は心の底から感謝している様子を見せ、オランウータンの前に跪いてそれを飲み干した。彼らは互いにうなずきあい、ほほ笑みあつてから別れた。オランウータンの背中が見えなくなつてから、峰岸高雄は再び口を開いた。

「君と話をしてみたいと思つていたんだ。でもその願いもかなわなかつた。今日こうして話すことができて、色々わかつたよ。君が僕の思い通りにならなかつたのは、君がもともと僕の夢じゃないからなんだな。僕の夢が楽しくなくなつたのは、君がその一番の果実を食べてしまつていたからだ。僕は君にまだ聞きたいことがあるんだけど、聞いてもいいだろうか。」

ジロンドがうなずくと、峰岸高雄はいくつかの質問をした。

僕は確かにいつも寝ているけれど、でも夢を見ていないときもあると思うんだ。夢と夢の間とかね。そういうとき、君は一体どうしているの。真つ暗闇に閉じ込められているのかい。ジロンドはそうだと答えた。しかし体が動かせないわけでも狭いところ押し込められているわけでもない。暗くて先が見えないぶん、足元にも頭上にも本当に何もないぶん、俺は限りなく広いところで俺自身だけを感じている。それにああいう静かな、まぶしさのない夢を見るものもある。長く生きた木の夢などあれにとでも良く似ていて、違うのは、夢の中でなければいくら探しても夢の実がみつからないことだけだ。……僕はもうすぐ死んで夢も見なくなると思うんだけれど、そうしたら君はどうなるのだろうか。お前が死んだ瞬間俺は違う夢に飛んでいくことができるだろう。以前、眠りながら死んだコアラの夢に居合わせたことがあるが、気付いたらユーカリの木に住む虫の夢の中にいた。……

峰岸高雄は、ジロンドの声を全身に響かせるように静かに聞いていた。その余韻がすっかりなくなってから、最後の質問だとジロンドの目をじっと見た。

「君たちは生まれたときから一人だつていうけど、じゃあ、なんで自分は夢を渡る生き物だつてわかるの。誰からも教えられていないのに、一番おいしい実が栄養になるってこと、どうして知ったんだ。狼に育てられた少女は、一生人間の言葉を話せなかったと聞いたよ。」

ジロンドは少し首をかしげ、両脇に鋭くくりぬかれた目を二度ほどぱち、ぱち、とした。

「さあな。でもそれは人間の話だろう。俺は生まれたときから俺が俺だということを知っていた。ジロンドという名だつてこともな。なにしろ、俺は人間じゃないんだ。」

そう答えると、ジロンドは峰岸高雄のパジャマの胸の辺りに視線を集中させた。峰岸高雄はそうか……と呟き黙り込んだが、その視線を受けすぐに胸ポケットに手をやった。

「これ、だろう。」

峰岸高雄の手の上で赤い旗はくるっと丸まってスモモほどの大きさの堅い果実になった。ジロンドの目がキラリと光ったが、峰岸高雄はそれを素早く口に放り飲み込んだ。

「僕は君みたいになつてみたかったんだ。」

峰岸高雄が言い終わる前に、怪鳥ジロンドは峰岸高雄を丸呑みにした。

(終)

モンスタ―



織田 高広

衝動が止まらない。誰かを殴つてぶつ壊してみたり、わざと電車に轢かれて自分を壊してみたり、とにかくもう何でもいから、思いつきりハジケてみたくてうずうずしている。

きっと私の中には何かがある。背負いきれないほどの衝動が起きると、私はそう思うことで、自分と衝動とのバランスをとろうとしていた。けれど、そうしたからといって衝動が止まるわけではない。もしかしたら次の瞬間、自分でも気付かぬうち